

2021 年度

国 語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

1. 問題冊子は監督者の指示があるまでは開いてはいけません。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。問題冊子は受験番号のみを記入してください。
3. 試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。
5. 問題冊子および解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受 験 番 号	
------------------	--

* 解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 春はカンダンの差が激しい。
- ② 郵便物をトドける。
- ③ 機械がコシヨウする。
- ④ 図書館で利用トウロクをする。
- ⑤ エイキユウに世界平和を守る。
- ⑥ ウチユウ飛行士を目指す。

問二 次の二つの熟語が反対語の組み合わせになるように、□に入る漢字一字を答えなさい。

前進 ↑ ↓ 後□

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学生の「わたし」は、二人の弟、小学四年生の元太^{げんた}、二年生の洋平^{ようへい}にせがまれて、ホタルを見に出かけた。ホタルを見つ
けることができなくて帰ろうとした時、たまたま「わたし」と同じクラスの「イワシ」「森くん^{もり}（ヒロ）」と出会った。二人
はホタルを見せてくれるといい、「わたし」と弟たちを林道に案内した。

林道の右側は「むじな池」とよばれる沼^{ぬま}。昔、近所の男の子たちとザリガニを取りにきたことがある。柵^{さく}はあったけど、簡単
によじのぼって中に入れた。でも、何年か前、沼の周囲を石垣^{いしがき}で囲ってからは、誰もここで遊ばなくなった。「むじな池」を通
りすぎると、今度は急な斜面^{しやめん}を左にカーブするように上っていく。

「ゆっくりでいいからね。気をつけて」

何度も洋平にいいきかすうち、前の三人からだいぶん遅^{おそ}れてしまった。

（イワシったら！ こんなとこ歩くの、なれてないんだから、もう少しゆっくり行ってくればいいのに……）

心の中でブツブツ文句をいいながら、はるか先を行く懐^{かいちゆう}中電灯の光を頼^{たよ}りに、細いけもの道を必死に進んでいった。洋平は
めずらしく泣き言もいわずがんばってる。

「右はガケだから、なるべく左を歩^あけて」

上のほうから元太の声が聞こえてきた。丈^{たけ}高い草におおわれて、しかも暗闇^{くらやみ}の中だと、確かに足元の地面がどこまであるかわ
からない。あわてて洋平のTシャツの背中をつかんで、左寄りに道を選びながら、中腹あたりまでのぼった時だった。突然^{とつぜん}、斜^{なな}
めに倒^{たお}れかけた大木が、とおせんぼするように行く手をふさいでいた。頭上にかぶさってた深い闇がとぎれて、辺りがまたうす
ぼんやりと見えるようになった。倒れかけた木の、巨大^{きょだい}なタコの足のような根っこが半分地面から持ちあがっている。その前に
三人が立っていた。

「うわっ、すっごーい！」

洋平が歓声^{かんせい}をあげてかけよった。

「ばっかつ、でかい声だすな」

元太があわてて懐中電灯を取りあげて、消すのかと思ったら、そのままその場にしゃがみこんで、

「すげえだろ？ この下、ほら穴になってんだぜ」

照らした場所を見ると、むきだしになった根っここの下に、ゆうに子どもが三人は入れそうな大きな穴があいていた。

「すごーい。ここ、にいちゃん達の秘密基地？」

洋平が今度はひそひそ声で聞いた。

「いや、おれらの基地は、もう少し先。ここはホタルの基地」

「ホタルの基地？」

思わず聞き返した。が、

「いいから、早くすわってよ。ホタル、見るんでしょ？」

元太はこれ以上待ちきれないといったようすで、Tシャツのすそを引っぱった。そして、まだめずらしそうにほら穴をのぞきこんでる洋平のえり首を掴^{つか}むと、自分の横に座^{すわ}らせた。わたしも洋平の横にしゃがんだ。ちょうど太い幹に寄りかかるような形で、五人が一列に並んだ。

「ジーツとして、動かないで。木になったふりするんだ。そしたら、ホタル達、安心して出てくるから」

元太達が興奮^{おほさわ}して、大騒^{おほさわ}ぎしないよう、きつとイワシがそういったんだろう。洋平も神妙^{しんみょう}な顔でうなずいた。

(木になったふり……か)

わたしもなんだかドキドキしてきた。

話し声が途切^{とぎ}れると、シーンと染^しみるような静けさが辺りを包んだ。聞こえるのは、時おり木の葉がさわさわ鳴る音と、下の田んぼからのぼってくるざわめきだけ……。

頭上を見上げると、黒々とした木々のシルエットの向こうに、かすかにほの明るい群青色ぐんじょういろの空。その真ん中にポツンと一つ、小さな星が光ってる。

元太も洋平も息をつめるようにして、目の前の闇に目をこらし^②てる。互いの心臓の音が聞こえるような気がした。その時、元太が「あつ」と小さな叫さけび声をあげた。

(あ！)

一瞬いっしゅん、今見上げた空の星が落ちてきたのかと思った。想像してたより、ずっと強くて明るい光が、ふわふわと茂しげみの上を飛んでいく。

「あーっ！」

洋平も思わず大声をあげて、あわてて両手で口をふさいだ。

「あつ、あそこにも……」

元太の指さすほうを見ると、右の茂みの中にキラキラ光ってるのが見えた。イワシが突然立ちあがった。そして、その光のほうに素早く近づいていくと、両手でなにかを包むようにして戻もどってきた。差さしだされた指のすき間から明かりがもれている。イワシがゆっくり両手を開いた。手のひらに小さな黒い虫が止まった。お尻しりのあたりがぼうっと光ってる。

(これがホタル……)

もつとよく見ようと顔を近づけた瞬間、
1 羽を広げて飛びたつた。と思うと、光の帯を引くように暗闇の中に消えていった。

「きれーい」

思わず、《 X 》。

「こんな近くで、初めて見た」「ほくもっ」

元太と洋平も、興奮をおさえきれないようすでホーツと息を吐はきだした。

「おまえらも、捕まえてみろよ」

ニコニコしながらイワシがいった。

「えっ?」「いいの?」

二人はびっくりしたように聞き返した。

「ホタルって、意外と人なつっこいから、簡単に捕まえられるよ。ほら、あそこにもいる」

イワシの視線の先を追うと、いつのまにこんななふえたんだろう? いくつもの小さな光が、互いに追いかけてこするようにふわふわと飛びかっていた。元太と洋平は大喜びでかけよっていった。

「足元に気をつけろよ」

イワシは楽しそうに、二人のようすを眺めている。けど、やたらめちやくちやに追いまわしたので、ホタルはみんな、高い木のとっぺんのほうに逃げていった。

④「もうやめなさいよ」

わたしはハラハラしながら、二人を呼びもどした。

その時、さっきイワシがいったことばを思い出した。

「そういえば、ホタルの基地って、どういう意味? どうしてここ、こんなにたくさんホタルがいるの?」

イワシは、ちよつともったいをつけるようにあごを反らせて、

「じつは、あいつら、おれらが育てたんだ」

といった。

「えーっ? どういうこと?」

「ホタルって、田んぼや川の土手に卵産むって知ってんだろ?」

大事な秘密を打ちあけるように、「A」な表情で話しはじめた。

「おれら、ガキのころから、しょっちゅうここに遊びに来てたんだ。『むじな池』をあんなふうに石垣で囲む前は、すげえたくさんいたんだよ。けど、田んぼのまわりもアスファルトになって、車がジャンジャン走るようになって……かわいそうに、ホタ

ル、安心して卵産む場所なくなっちゃった。だから、ヒロと二人でホタルの池を作ったんだよ」

「ホタルの池？」

「その池、どこにあるの？」

わたしをおしのけるようにして、元太が 2 身を乗りだしてきた。

「いくらダチでも、それだけは教えられないな」

「えーっ、教えてよー」「教えてー」

元太と洋平が【B】にイワシの体をゆすつた。イワシは黙^{だま}って首を横にふりつづけた。その表情があんまり真^{せま}に迫^{せま}つたので、一瞬信じる気持ちになった。

「まさか、ほんとに池なんて、作ったの？　そこにホタルが卵産んだの？　すごい！　じゃ、これ、イワシと森くんが育てたホタルなの？」

思わず興奮して叫んだ。イワシは黙^{だま}って答ええない。その時、

「池を作ろうとしたのは、ほんとだよ」

横から森くんの声が聞こえた。びっくりしてふり向くと、

「完全に失敗だったけどな」

クスクス笑って、イワシの顔を見た。

「チェツ、バラしちゃうのかよう？」

イワシがつまらなそうにブウツと《Y》。

「なんだ、嘘^{うそ}なの？」

「おれらもガキだったから、あほだよなあ」

ハハッと笑って、頭に手をやった。

「さつき通ってきた」^⑤『むじな池』の近くの林の中に、一日がかりで、せつせと穴掘^ほって……雨が降ったら、水がたまって、池に

なるだろうってさ……」

【 C 】に白状しはじめた。

「ほんとにかなりでっかい穴だったんだ。できあがった時は、すげえうれしかった。ここなら、ホタルが安心して卵産めるぞって……」

「なかなか雨が降らなくて、『むじな池』からペットボトルで何度も水くんで運んだよな」

森くんも懐かしそうにいった。

「何日目かに、やっと雨がふって、だいぶ水がたまって……いよいよ、おれらの池ができるぞって、大喜びして……けど、次の日、来てみたら、半分以上地面に吸いこまれて……」

「二、三日したら、ただの穴にもどってた」

オチをつけるようにいって、森くんがまたクスクス笑った。

「それ、いつの話？」

「おれが引越してきて、すぐの夏休みだっけ？」

「いや。五年の夏休みだよ」

「そっか。あん時は、すげえ大仕事したって思ったよなあ」

「そうだね」

森くんがしみじみとした顔でうなずいた。

⑥「おれら、本気だったもんな。ここのホタル、守るんだって……今、考えると、笑っちゃうけどな」
二人で顔を見あわせて、楽しそうに笑った。

（泉啓子『晴れた朝それとも雨の夜』〈童心社〉より）

問一

1・2

に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、ガバツと イ、ピョンと ウ、ジツと エ、パツと

問二

【A】～【C】に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、痛切 イ、正直 ウ、真剣しんけん エ、奇妙きみょう オ、乱暴

問三

《X》《Y》に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

X ア、息が合った イ、鼻息が荒あくなった

ウ、ため息がでた エ、息を殺した

Y ア、口をとがらせた イ、口を割った

ウ、口をはさんだ エ、口をにごした

問四

——線部①「神妙な顔でうなずいた」とあるが、このときの洋平のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、自分達が何をすべきかわかりやすく教えてくれるイワシに、感謝している。
- 2、注意されるのがいやなので、おとなしくイワシの指示に従おうとしている。
- 3、どうしてもホタルを見たいので、イワシの言う通りにしようと思っている。
- 4、ほら穴の前で歓声をあげたことを思い出し、反省する気持ちを示している。

問五

——線部②「互いの心臓の音が聞こえるような気がした」とあるが、このときの「わたし」のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ホタルがいつ現れるかと待っている、みんなの気持ちの高まりを感じている。
- 2、ホタルが現れたときに見のがさないよう、意識を集中させようとしている。
- 3、みんながどのような気持ちでホタルを見ようとしているか、気になっている。
- 4、声や音を出して静けさを破つてはいけなと考えて、きんちようしている。

問六

——線部③「キラキラ光ってる」とあるが、ホタルが放つ光の印象を、別のものを通して表現している部分がある。その表現が含まれた一文を文中から探し、初めの五字をぬき出しなさい。

問七

——線部④「わたしはハラハラしながら、二人を呼びもどした」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、二人が足元のよく見えない暗い所ではしゃぎまわっていて、危険だと思ったから。
- 2、めちゃくちゃに走りまわっている二人が、イワシをおこらせてしまうと思ったから。
- 3、ホタルが高い木のとっぺんのほうに行ってしまう前に、二人によく見せたかったから。
- 4、二人が興奮して追いまわしているので、ホタルがおどろいて逃げてしまうと思ったから。

問八

——線部⑤「『むじな池』の近くの林の中に、一日がかりで、せっせと穴掘って……」とあるが、イワシたちは何のためにこのようなことをしたのか。二十字以内で答えなさい。

問九 — 線部⑥ 「二人で顔を見あわせて、楽しそうに笑った」とあるが、このときの二人のようすとして適切なものを次の中

から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、時が流れた今でも、互いに仲のよい友達でいられることをうれしく思っている。
- 2、当時の楽しい思い出が心によみがえってきて、ほがらかな気持ちになっている。
- 3、当時の自分たちの行動を思い出して子どもっぽいと感じ、はずかしがっている。
- 4、自分たちの願いをかなえられなかったさびしさを、乗りこえたいと思っている。

問十 「イワシ」の人物像として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、自分の考えを大切にして、他の人に左右されない人物。
- 2、統率力とうそつがあつて、強い力で人を従わせようとする人物。
- 3、年下の者への気づかいがある、おおらかで優しい人物。
- 4、陽気で明るい、お調子者で物事を深く考えない人物。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「いれもの」は、実用的にいえば文字どおり、「もの」を「入れる」ための「もの」ということであって、それ以上でも以下でもない性質のものである。

1、「いれもの」をたんに実用的機能の面だけで割り切って考えることができないのも、人間のおもしろいところだ。もちろん、要するに、ものがいればそれでよい、というので、ありあわせの古いボール箱などを「いれもの」として使うこともあるが、それは、たとえば引越しのとき、といった臨時の「いれもの」であって、まがりなりにも、生活備品としての「いれもの」には、われわれはなんらかの美的くふうを凝らす。古いボール箱に紙を貼り、空きカンにはペンキを塗る。「いれもの」は、うつくしくなければならぬのだ。「いれもの」がうつくしくなければ、生活そのものがうつくしくないのである。

商品化された「いれもの」を買うときのわれわれは、ときとして、そのなかにはいるものを買うときよりも慎重である。
2、小麦粉だの砂糖だのは、日常の必需品であって、べつに銘柄を指定することもないが、それらの食品をいれるキャニスターを買うときには、あちこちの店を歩きまわって、よいデザインの品物をさがす。①値段が多少高くても、うつくしいものを手にいれようと一生けんめいになる。

タンスなどもそうだ。値段と実用性からいえば、デパートの特価品売場にたくさんタンスがならんでいるから、そのなかからえらばばそれでよいのだが、ながく使う家具、と思うと、なかなか実用一点ばりで【A】に買う気にはなれない。使われている材料だのデザインだのを吟味して、いいタンスをさがしまわる。

つまり、「いれもの」は、たんなる「ものいれ」ではないのである。「いれもの」はそれじたいの価値をもつのである。(中略) 女性のハンドバッグなどもその一例だ。実用的機能からいえば、財布だの化粧品だといった小物がそのなかにはいれればそれでよいので、極端にいえば、丈夫な紙袋だつて間にあう。しかし、そうはゆかない。ハンドバッグは、「ものいれ」のではなく、それじしん、うつくしい「もの」でなければならぬのである。

3、ハンドバッグその他の袋ものに、高いおカネを払う。

そればかりではない。「いれもの」がうつくしい「もの」であることによって、そのなかにはいるものの価値もすっかりかわってしまふからふしぎである。そのことが如実^{じゆじつ}にわかるのは食器^{しょくき}という名の「いれもの」だ。

たとえば、ここに、一丁^{へんと}のなんの変哲^{へんてつ}もない豆腐^{とうふ}がある。これを湯豆腐にして食べよう、と思う。

4

、湯豆腐をつくるための「いれもの」は、いろいろある。

もしも、安上^{やすあが}りにやろうと思つたら、雑貨店^{ざつか}に行つて、小さなアルミのナベを買つてきたらよい。このナベの底^こに昆布^{こんぶ}を敷^しき、豆腐を入れて火にかければ、やがて湯豆腐はできあがる。味もそうわるくはない。学生街の食堂などで湯豆腐といえは、だいた、こんなふう^{ふう}に安上^{やすあが}りの「いれもの」にはいったもの^{もの}のことを意味する。わたしも、しばしば、そういう学生食堂の湯豆腐を食^くべてきた。

- 1 そして、とてもおいしい。
- 2 だが、それだけが湯豆腐の「いれもの」なのではない。
- 3 おいしいかわりに、学生食堂のアルミ・ナベの湯豆腐のねだんの数十倍のおカネを払^{はら}わなければならぬ。
- 4 高級な湯豆腐の店では、京都の「たる源^{げん}」でつくられた、小型の湯ぶねのようなたるで湯豆腐の料理^りをしてくれる。木のおいがふんとして、たいへんに清潔^{けつせつ}だ。

このふたつの湯豆腐は、どちらがうか。材料として使われている豆腐にも、もちろん、ちがいがあるだろう。ひとくちに豆腐といつても、いろいろつくりかたのうえでのコツだの原料の大豆の質^{しつ}だのがちがうから、上等の豆腐と、ふつうのそれとはおなじだとはいえない。

しかし、より大きなちがいは、「いれもの」のちがひなのである。すくなくとも、わたしのよな味のシロウトは、「いれもの」で完全に「B」してしまふ。「いれもの」がよければ、それだけで、中身^{なみ}がおいしく感じられ、「いれもの」が貧弱^{ひんじやく}だと、あんまり食欲^{じよく}もわかない。

じつさい、日本の料理は、「いれもの」の芸術^{げいじゆ}なのである。サトイモとエンドウ豆の煮^につけ、といった、ごく素朴^{そぼく}な料理でも、

それが古九谷注2のうつくしい鉢はちにすこし盛りつけられて、サンショの葉などがあしらわれていると、天下の珍味ちんみとみえ、ギンナン注3をホウロクで煎いったものが、黒ウルシの皿で出されたりすると、これも、すばらしい食事だ、と感ぜられる。まさしく、ここに
あるのは、「いれもの」の魔術である。

「いれもの」の魔術は、こんにちのマーケティングの領域でも、しばしば使われている。容器のデザインをかえただけで、売上げが倍増した商品などもたくさんあるらしいし、われわれは、「いれもの」で商品を買ったりもする。注4

化粧品などは、そのいい例だ。中身にもちがいはあるのだろうが、クリームだのトニックだのはビンや箱のうつくしきで売っているようなものだ。化粧品のその性質を見きわめたいので、かつて、注6労組ろうそなどが、きわめて実質的な「いれもの」に化粧品をいれて、女子組合員に安く売ることを考えたが、それは成功しなかった。注5人間というのは、ふしぎな動物で、なかなか実用一点ばかりにはなれないのである。「いれもの」がお粗末そまつな化粧品は、あんまり効きそうにみえないのだ。

じつさい、われわれは、ものごとを「いれもの」によってはかる習慣をかなりむかしから身につけてしまっている。「いれもの」を意味する「うつわ」ということばは、日本語では、人間の性格をはかることばとしても使われてきた。日本の思考様式では、人間というものは、それじたい、ひとつの「うつわ」なのである。《C》

人間が、「うつわ」として小さいということは、その人間が包容力に欠け、偏狭へんきょうな精神しかもっていない、ということだ。《D》
ある人間が責任あるしごとに適任でない、というとき、その人間は、その「うつわ」ではない、とわれわれはいう。それだけ

の責任をいれる「いれもの」として、その人間がふさわしくない、ということだ。《E》
Y □ □ 晩 □ □、などというコトワザもある。なにごとをも包容できる大きな「うつわ」は、その輪郭りんかくがなかなかはっきりしない。だから、その「うつわ」が、はっきりしたがたをとるまでには時間がかかるのである。

日本語で「器量人」というのは、「うつわ」がよくできている、ということだ。《F》もっとも、近代日本語では、「器量」というのは、おおむね女性の容色についての形容詞になってしまったが。「器用」というのは、「うつわ」としての人間が、みずからの「うつわ」の使いかたをよく知っている、ということである。

こんな例をあげていたらきりがなが、日本文化では、人間もまた、ひとつの「いれもの」なのであった。注4ダンスや戸棚とだなのよ

うに、この「いれもの」は「もの」をいれるものではない。人間という「うつわ」は、それをとりまく環境かんきやうをうけいれる認識にんしきと評価能力の「いれもの」である。

そして、人間はその一生のなかで、その「うつわ」にたくさんの情報を収容し、それを処理する。つまり、当世ふうにいえば、人間の「うつわ」の大きさは、情報容量の大きさ、ということになるか。日本人が、人間を「うつわ」として考えてきた、というはその意味で、たいへんにおもしろいのである。

(加藤秀俊『暮しの思想』〈中央公論新社〉より)

注1・キャニスター…保存するための、ふた付きの容器。

注2・古九谷…十七世紀に、現在の石川県いしかわで作られていたとされる焼き物。

注3・ホウロク…平たい土どなべで、豆などを煎るのに使う。

注4・マーケティング…消費者に商品を買ってもらえるしくみをととのえること。

注5・トニック…髪型かみがたをととのえるために使う液体。

注6・労組…労働組合。

問一

1 4 に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、だから イ、たとえば ウ、あるいは エ、しかし オ、そして

問二

【A】・【B】に入る二字のことばを次の漢字を組み合わせて作りなさい。

軽 参 解 気 降 理

問三 ……線部Ⅰ・Ⅱの本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「吟味して」

- ア、たくさん用意して見比べて
イ、周りの人に聞きまわって
ウ、念を入れて調べて
エ、楽しみながら味わって

Ⅱ「偏狭な」

- ア、意欲がなくいい加減な
イ、特ちようもなくへいほんな
ウ、成長していなくて幼い
エ、自分のせまい考えにとらわれた

問四 〓線部 a ～ d の「の」の中で他とは使い方の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問五 ～線部 X 「小さなアルミのナベを買ってきたらよい」を文節に分けると、いくつに分かれるか。漢数字で答えなさい。

問六 ～線部 Y 「□□晩□」は、四字熟語である。□に入る漢字を、一字ずつ答えなさい。

問七 ……線で囲まれた部分の 1 ～ 4 を正しい順序に並べかえ、番号で答えなさい。

問八 本文には次の一文がぬけている。《C》～《F》のどこに入れたらよいか、記号で答えなさい。

そして、その「うつわ」としての人間が、どれだけのものをいれる能力をもっているかで、「人物」が判定されてきた。

問九 — 線部①「値段が多少高くても、うつくしいものを手にいれようと一生けんめいになる」とあるが、人がこのような行

動をとるのは、どのような考えをもっているからか。「〜という考え。」に続くように文中から十八字で探し、ぬき出しなさい。

問十 — 線部②「そのことが如実にわかるのは食器という名の『いれもの』だ」とあるが、「食器」と「なかにはいるもの」の関係について述べた一文を文中から探し、初めの十字をぬき出しなさい。

問十一 — 線部③「それは成功しなかった」とあるが、これは具体的にどういうことか。理由も明らかにしながら、文中のこ
とばを用いて四十五字以内で答えなさい。

問十二 — 線部④「人間もまた、ひとつの『いれもの』」とあるが、人間という「いれもの」では何を行うのか。それをあら
わしている部分を文中から十九字で探し、ぬき出しなさい。

問十三 本文の内容と合っているものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、人間を「うつわ」として考えてきたことで、日本人は「いれもの」のうつくしさを大事にするようになった。
- 2、日本人が人間の性格を「うつわ」で表現することには、ものごとを「いれもの」ではかる習慣が関係している。
- 3、人間の器量の大きさや器用さを重要視してきたため、日本人は人間を「うつわ」として考えるようになった。
- 4、日本人は「いれもの」にこだわる性格であったため、実用性などの重要な点を見落とすことも多くなっている。

国語 解答用紙

問十三		問十二		問十一		問十		問九		問八		問六		問四		問二		問一	(三)	
																		1	(三)	
																		A	2	(三)
																		B	3	(三)
																		C	4	(三)
																		I	(三)	
																		II	(三)	
																		↓	(三)	
																		↓	(三)	
																		↓	(三)	
																		(三)	(三)	
																		(三)	(三)	
																		(三)	(三)	

という考え。

問九		問八		問六		問四		問二		問一	(三)	問二		問一	(三)
												1	(三)		
												A	2	(三)	
												B	3	(三)	
												C	4	(三)	
												X	(三)		
												Y	(三)		
												(三)	(三)		
												(三)	(三)		
												(三)	(三)		

受験番号
氏 名

得 点